

はじめに（＜特集＞「国際社会学」とは何か）

著者	佐々木 てる
雑誌名	年報筑波社会学
号	16
ページ	1-4
発行年	2004-12
URL	http://hdl.handle.net/2241/108013

特集：「国際社会学」とは何か

はじめに

佐々木 てる

本特集は、2004年5月2日に、学術総合センターに於いて開催された筑波社会学会定例研究会特別企画シンポジウム「『国際社会学』とは何か」をもとに構成したものである。シンポジウム当日は下記の方々に登壇していただき、学会会員を含め約50名近くが参加し活発な議論が交わされた。

登壇者

司 会 果 町村 敬志 氏 (一橋大学)

報 告 者 梶田 孝道 氏 (一橋大学)

駒井 洋 氏 (中京女子大学)

コメンテーター 石井 由香 氏 (立命館アジア太平洋大学)

櫻本 陽一 氏 (和光大学)

五十嵐泰正 氏 (日本学術振興会)

本特集ではシンポジウムの報告内容に報告者、コメンテーターの方々が加筆、修正を加えたものを収録した。それぞれ独立した内容として仕上がっているが、本特集の性格上、質疑応答形式の部分を考慮し「コメントに答える」を掲載している。以下シンポジウムの企画経緯の説明、および当日の報告内容、若干の感想を述べておく。

今回のシンポジウムは、開催予定の2004年春がちょうど駒井洋先生の筑波大学ご退官の時期にあたるということもあり、これにあわせて氏の主たる研究領域である「国際社会学」をテーマとすることになり、鈴木規之氏 (琉球大学) と佐々木てるが企画コーディネートにあたることになった。しかしながら、「国際社会学」の何をテーマとするかが問題となった。そもそも「国際社会学」が扱うテーマは、人の移動やエスニック問題から、NGO、NPO といった国境を越えた活動の問題、さらには地域紛争、環境、国際資本の問題まで多岐にわたる。さらに近年ではオリエンタリズム、ポスト・コロニアルやカルチュラル・スタディーズ、グローバリゼーションといった方法論や視点が注目を集め論者によってスタンスが違っている。この領域に係わる多くの研究者は、「国際社会学」という講義や講座で、いかに体系的に教えるかについて苦慮したことがあるだろう。つまり「国際社会学」で扱えるテーマは多岐にわたるが、実は体系的に論じている研究者は少なく、その方法規

準といったものは深く追求されてこなかったといえる。そもそも「国際社会学」という研究領域の存立基盤はいったい何か。何をもってして「国際社会学」といえるのか。国家を超える現象であれば、すべてその対象になるのか。今後の「国際社会学」の展開にはいかなる可能性があるのか。本シンポジウムではこうした問いを前提として、「国際社会学」の対象、方法、可能性といったものを広く論じてもらおうという企画趣旨となった。

また企画意図に即し人選をおこなった結果、駒井氏と並び、「国際社会学」を先駆的に展開されてきた梶田孝道氏に報告を依頼し、快諾をいただいた。アジアを中心に研究をされてきた駒井氏と西欧を主な研究対象とされている梶田氏の対比という意味で、興味深いものがあつた。また『エスニック関係と人の国際移動——現代マレーシアの華人の選択』（1999、明石書店）を出版され、アジアの地域にも明るい石井由香氏、P. プリュデュエ研究者で、西欧の研究事情にも詳しい櫻本陽一氏、そして近年の日本の外国人問題を、都市社会学やカルチュラル・スタディーズの視点からあつかっている五十嵐泰正氏にコメンテーターを依頼することとなった。企画側としては「先駆者」対「若手」というものを意識したものであつた。そして議論をまとめてくださる方を熟考した結果、都市、エスニシティ、グローバリゼーションといった各分野にも精通しており、本学会員でもある町村敬志氏に司会を依頼することに決定した。以下、報告内容を紹介しておくことにする。

まず梶田氏は、「国際社会学と比較社会学——『ナショナル』か『ポストナショナル』か？」と題し、主に西欧の移民研究の文脈における、トランスナショナルな（国際社会学的な）視点の重要性と、比較社会学的な視点の導入の可能性を論じた。報告主旨は、1. ポストナショナルなメンバーシップのとらえ方とその限界点について（トランスナショナルな視点）、2. 移民問題を調整していく場としての、「ネーション」および「社会」という2つの軸の必要性について（比較社会学的視点）、3. 国際的な視野に基づいた思想（国際人権レジームといったもの）が国内に「埋め込まれ」ていく瞬間をみていく必要性（「第3の解釈」の視点）についての3点であつた。結論として、国際社会学と比較社会学の方法論的相互作用、「比較社会学の国際社会的基盤」を主張した。梶田氏の報告は、国際社会学的な分析方法の脆弱性を乗り越え、現実レベルでいかに有効な議論を展開できるかを、比較社会学の方法論を補強しつつ提示するものであつた。その結果、新たな国際社会学の可能性が提示されることとなった。

駒井氏は「国際社会学の可能性」と題し、1. 国際社会学の提唱とその現在の意義、2. 当時の国際社会学の構想と反省、3. アジア研究の脱オリエンタリズム化、4. 国際社会学の立場からの国際移民研究について報告をおこなつた。駒井氏の報告では、国際的な視点から研究を行うにいたつた経緯も含め、多岐にわたる論点が提出された。具体的には欧米的な人権思想の行き詰まりから、仏教における「空」の理論に由来する「寛容」の精神を中心とした思想を打ち立てる必要があることが指摘された。さらにアジア連合といった共同

体の必要性、日本経験者が持つ海外での影響力の調査の必要性が指摘された。結論として国際社会学を「ローカル」「ナショナル」「文明」「グローバル」の四層の相互依存関係から読み解いていく方針を提示した。駒井氏の報告は、アジアからの視点を中心にしつつも、「国際社会学」という学問自体のとらえ方を提示するものであったといえる。

これらの報告を受け、コメンテーター独自の感想や質問といったものが提出された。

まず石井氏は、「国際社会学」の方法としてグローバルとローカルといった二分法からの脱却していく姿勢を主張した。つまり双方の相互作用や関係性に注目していくこと、具体的な文脈では現地の人と日本駐在員の関係、日本におけるエスニック集団と地域の人との関係といった点に注目することの必要性を指摘した。そしてその視点から様々なレベルの「制度」との関連性を追っていくことが、「国際社会学」の方法論的基盤となることを示唆した。

次に櫻本氏は、主に「国際社会学」の可能性に関するコメントや質問をおこなった。「国際社会学」という言葉が示す対象の設定はいかに考えるか、多文化主義と既存の国民国家という枠組みの関係性、移民問題における国境に対する理念と政策のずれ、国際的な制度としてのEUの試みに関する見通し、トランスナショナルな存在に対する法規制の問題など、特に西欧の事例を念頭において議論が提出された。

最後に五十嵐氏からは、「国際社会学」の方法論的視座として、主に日本の移民問題の文脈から「拡散される国際社会学」の可能性が提示された。そこでは「国際社会学」という視点が既存の学問領域に介入していくことによって鍛え直される可能性、さらには日本社会を見直していける可能性が提示された。いわばフェミニズム、ジェンダー研究が男性中心主義への問い直しであったとするならば、「国際社会学」は自国中心主義的な考えを問い直す契機となることが主張された。

感想として今回のシンポジウム、特集を通じて考えた「国際社会学」の課題を3点ほど述べておくことにする。

第1点は、近年の研究スタイルが全般的に臨床的になりつつあることへの問題提起である。つまり研究対象とは、それぞれの関心にそって設定されるものではあるが、ミクロな視点のみを重視すると地域、国家、国際との関連性を見失うことになる。そのため特に「国際社会学」の場合、それらの関連性を見ていく広い視野が必要となっている。

第2点は「国際社会学」と移民の問題との関係性である。「国際社会学」の対象として、国内のエスニック問題や人の国際移動の問題といったものは非常に代表的なテーマとして扱われる。しかしながら、移民の問題は国際社会学のテーマの1つであって、そこで使用されている方法論が、そのまま「国際社会学」にあてはまるかは別問題であるという点である。つまり「国際社会学」独自の方法論の提示が課題として残った。その意味で、梶田氏の「国際社会学の比較社会学的媒介」、駒井氏の「四層の相互依存関係性の追求」、石井

氏の「ローカル、グローバルの二分法からの脱却」、五十嵐氏の「拡散する国際社会学」といった視点は、この課題を考えていく上での指針となったといえる。

第3点は「国際社会学」とはEUやアジア共同体といったポスト・ナショナルな枠組みを構想していくという課題を持っている。梶田氏の報告にもあったが、このような国家の枠を超えた試みは人類史上初のものであり、過去のパターンは当てはまらない。まったく新しい「国際社会」そのものを研究していくことが、今後の課題であり可能性でもあるといえる。

最後に本特集が「国際社会学」を学ぶ人にとって、知的刺激となり、さらにこの領域が発展していくことを期待したい。また本特集に寄稿して下さった報告者、コメンテーターの方々、そしてシンポジウムにかかわっていただいたすべての方々にこの場をかりて感謝の意を表したい。

(ささき てる／筑波大学)